日本人来場者が経験した
在日朝鮮学生美術展
―その感想から―

仲野　誠・鳥取大学教員

一、はじめに

本誌23号（二〇一四年一月刊行）への寄稿「この時代に在日朝鮮学生美術展と出会うということ」では、在日朝鮮学生美術展（以下、学美）の力を概観した。本稿では、二〇〇九年度の第三七回から開催されている学美山陰展（鳥取展と島根展）と、神戸展への日本人来場者の感想（アンケート）をもとにして、来場者によって学美がどのようにリアルに経験されているのかを描いてみる。

紙幅の都合上、筆者の解釈は最低限にとどめ、ごく一部の感想を紹介する。そして本稿を学美の可能性を考えるためのひとつの資料としたい。

二、来場者の感想から

1・憧れとしての学美―「私の絵もこんな風だったらいいな」

二〇一〇年度の第三八回展（鳥取展）で、学美を観た小学四年生は「私の絵もこんな風だったらいいなと思いました」と筆者に語った。これは学美が彼女にとっての憧れとして立ち上がったことをきわめてシンプルに表す言葉である。「みてたのしかった。学校でやっているのより、おもしろそうだった。私もやってみたい（一〇代・第四〇回鳥取展）」など、類似の感想は多数あり、日本の同年代の子どもたちにとって学美は憧れ、あるいはめざすべき目標となっていく様子がうかがえる。以下、そのような感想を列挙する。

「私も中学生だけどこんなにすばらしい絵はかけないと思いました。その人その人の一人一人の『おもい』が強くつたわってきました。すごくおもしろかったなぁとおもいました。」（一〇代・四〇回鳥取展）

第38回鳥取展・オープニングセレモニー

「私も高校二年生で、油絵をかいていますが、同じ高校生なのにレベルの高い作品ばかりでおどろきました。どの作品からも作者の思いが伝わってきて、見る側にも様々な考え方をさせてくれるものばかりでした。細部まで丁寧にかかれていて、参考になるものがたくさんあったし、デザインは細かい描写でひとつひとつの発想がすごかったです。」（一〇代・四二回島根展）

「今まで色んな美術展を

観たり、自身でも描いて参加してきましたが、これほどワクワクする美術展は初めてでした。高校県展など見えない規制を感じる展覧会しか参加していなかったので、次に何が来るのか分からない絵を見続けるのは楽しかったです。同じ絵を描く者として、いいアイデアをいただいたと思います。自分になかった視点が増えたので今日帰ったら早速自分も描きたいです。会話したかのような気分です」(大学生・四〇回鳥取展)

「私は絵という一つの言語を体得している彼らを取り巻く環境を羨ましいと思った。彼らの表現には限界がない。これは絵の作者である一人の女子高生と話しをさせていただいたときに感じたことであった。彼女に絵についての解説を求めたところ、淀みなく快活に絵に込めた思いや制作過程の話などを聞かせてくれた。そこに他人の目を気にした恥じらいのようなものは感じられなかった。きっと彼女はありのままの自分を表に出しても、周りの人々が受け止めてくれるのだろう。そのような安心感の中で彼女は表現と共に生きてきたのだろう。彼女は表現においてどこまでも自由であった。彼女にも様々な葛藤があるだろうが少なくとも私にはそう感じられた。もう一度、思春期をやり直したいと思うくらい、私には彼女と彼女の作品がまぶしく見えた。」(大学生・四一回神戸展)

「羨ましい」とは、学美を訪れる若い日本人から幾度となく聞かされる感想である。後述するが、これは学美が鏡となって映し出されるいまの日本社会の課題を表す言葉でもあろう。

2・表現力への感動―鮮烈な塊

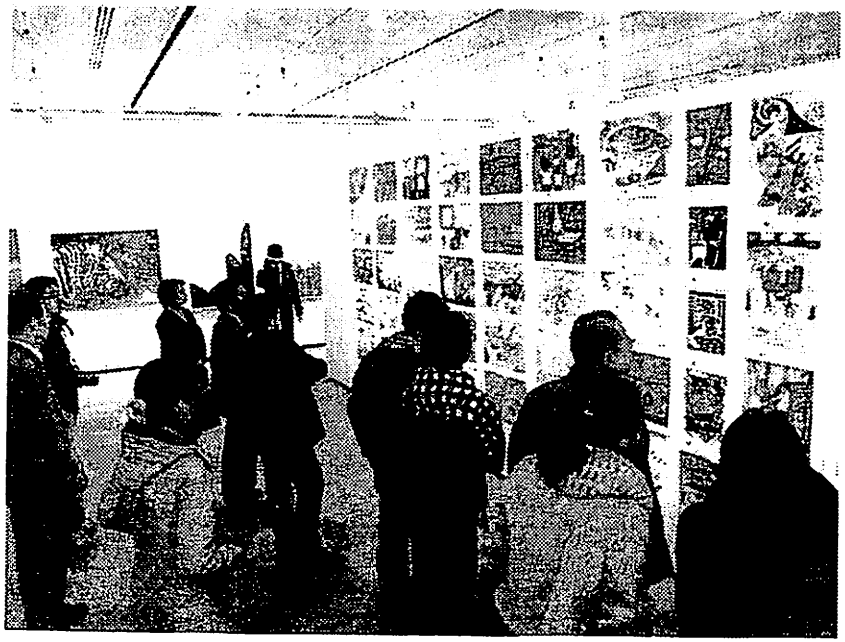
来場者の感想で多いのが、「作品全体に鮮烈な塊がごろごろ転がっているような雰囲気(大学生・四〇回鳥取展)」がある学美の表現力に素直に感嘆するものである。学美から強い力を受け取っている来場者が多いことがうかがえる。

「展示場に入り、初めて朝鮮学校の生徒の作品を見たときは衝撃を隠せなかった。これが高校生、中学生の描く絵なのかと、とても信じられなかった。……作品群の技術力の高さ、そして、表現の豊かさなど、他の学生のものとは比べものにもならないと思う。……多くの作品がありながらも、一つ一つ同じものがなく、時間を忘れて見入ってしまった。」(大学生・四二回島根展)

「初級部一年生の作品から私は頭の中をパンチされたような感覚を抱きました。その感覚は上の学年の作品を見ていても続き、高級部三年の作品を見る頃にはグッタリしてしまいました。

私が作品を観て疲れてしまった理由は二つ考えられます。一つ目は『作品の圧倒的な力強さ』です。どの作品もキャンバスからはみ出さんばかりに力強く描かれていて、中には本当に物が飛び出している作品もありました。描かれている線の太さはバラバラだし、直線的なものはほとんどありません。そして色の塗り方も輪郭から大胆にはみ出しているものもあれば、塗りムラがあって下地が見えてしまっている作品もありました。絵自体はすごく荒々しいため、教科書的な巧さは感じられませんでした。しかし、彼らの作品の良いところは、そのような枠組みを堂々と乗り越えてしまう痛快さだと思います。評価される絵を描いているのではなく、表現したいものを表現するというすごくシンプルで、とても難しいことをやってのけている彼らの作品は

第39回鳥取展



自信に満ちていました。とても堂々と描かれているため、私は作品を"見ている"というよりも、『見せつけられる』ような感覚に陥りました。朝鮮学校の生徒たちは描いた絵を評価されることで自信をもっていくというよりも、既に自信をもって絵を描いているのではないでしょうか。……

二つ目の理由は『作品の統一感の無さ』です。私がまでみてきた学生の美術展と言えば、だいたいの作品が『人』『風景』『花』といったものでした。……しかし今回の美術展はどれも描かれているものがバラバラで、多くの絵が抽象的なものでした。……どの作品も発想力が豊かで良い意味での分かりにくさを含んでいるため、頭の中での理解が追いつかず、全ての作品を見終わる頃には頭の中が混乱してしまいました。……私の経験上、『自由に絵を描け』と言われても、友だちの目が気になって『本当に自分が描きたいもの』よりも『だいたいみんなと同じもの』を描いていました。それが表現だと思っていたからです。しかし、今回の美術展は似たような作品がほとんどなく、驚くばかりでした。学校ではどのような指導がされているのかが気になりました。……『他人の目は気にしなくてもいいんだ』と勇気づけられた気持ちになりました。」(大学生・四〇回鳥取展)

作品の力に驚嘆する感想は他にも多数ある。

3・他者との出会い―在日の存在への気づき

学美を観る者はいつしか作品の向こう側にいる作家たちと出会い、その困難や葛藤にも想いを馳せるようになる。

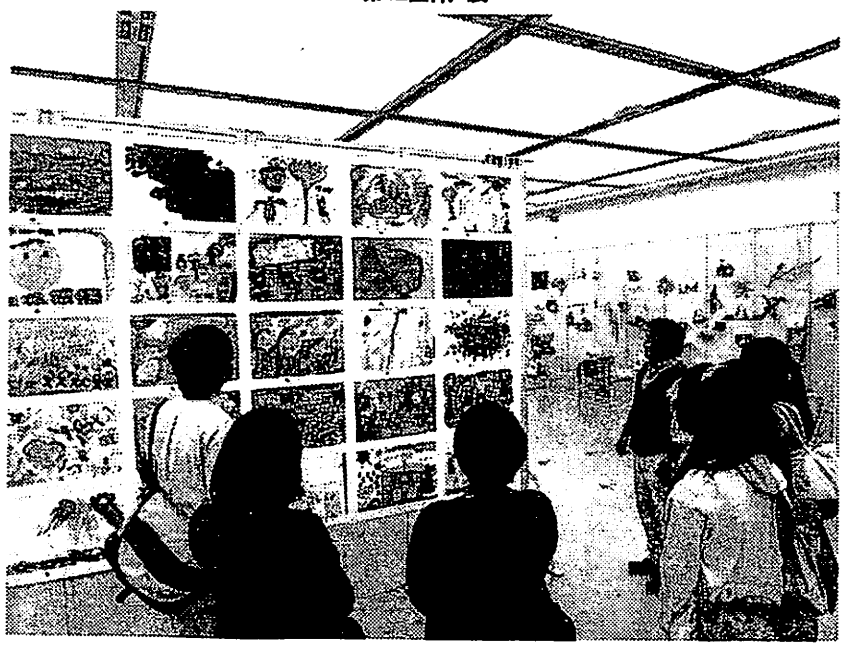
「朝鮮学校の生徒たちは私たちとは違う環境で育ち、それ故、アイデンティティの問題など、私が考えたことのない問題にも悩まされ、私とはやはり違うということを改めて実感させられた。違う環境で育ったからこそ、私にはないような表現の豊かさが生み出せるのではないかとも考えた。……あの朝鮮学校の学生たちの作品の引き付けるような魅力はなんだったのか。私は、在日コリアンの人々について少しの知識があり、朝鮮学校についての映画なども見た上でこの美術展を訪れた。一緒に行った友人は何も知らなかったが、私と同じように作品に引き付けられ、衝撃を受けていた。友人もこの美術展を訪れたことで、在日の存在に気づかされたように思う。友人のように、この美術展から、知っていくということもある。もっと多くの人がこの美術展を訪れてほしいと思う。私も周りの人に勧めていきたい。」(大学生・四二回

島根展)

「魂の叫びが伝わってくる作品に驚きました。在日朝鮮人という立場の中での様々な葛藤、苦悩がとても強く伝わってきました。日本の子どもではこのような深い世界を理解することはできないのではないかと思います。」(五〇代・四二回島根展)

「とにかく自由に表現できる彼らの環境がうらやましいです。……反面、在日朝鮮学生に対する厳しい状況について、

第42回神戸展



心を痛めました。彼らも同じ人であり、自由に生きていい。そして、この自由な表現力を広めてほしいと思います。」(大学生・四二回神戸展)

さらには、他者に出会うのみならず、学美の作品群には自分自身が映し出されていることに気づく者もいる。

「絵の中に私がいるような、みている私がゆるがされる、輪郭をなくしてしまうような、描いた人と私が、つながるような感覚でみました。私がいなくなるような感覚になりながらも、絵の中にたくさんの私がいる

ようで困りました。」(大学生・四二回島根展)

学美を観る者は、作品を観ているのみならず、他者に出会い、そして自分自身にも出会うことになるのではないだろうか。

4・鏡としての学美―自分を生きるということ

学美には、観る者の生き様を逆照射する鏡としての力も備わっているようだ。それまでの自分の表現、とくに自分が受けた学校教育を深く振り返る来場者が多いことが特徴的である。

「私は成長するにつれて、表現する機会もなくなり、同時に自由に表現することが苦手です。……子どもたちは周りの環境に恵まれ安心して表現できる、私とは正反対の位置にいます。『私も自由にもっと表現してみればよかった。』そう思いました。美術ではないけれど、文章を書くことで、自分を表現することが好きだったと思い出しました。作文や詩、短歌などたくさん考えて、書いていました。しかし、だんだんと表現することは恥ずかしいと思うようになってしまいました。同時に文章を書くこと、考えることが楽しいことも忘れていました。今回の子どもたちの作品の豊かさ、純粋さを目の当たりにし、私も純粋に表現してみたいと思いました。また、彼らの人の心を揺さぶるような感性を今後も無くさないでほしい。続けていってほしいと思いました。」(大学生・四二回神戸展)

「泣きそうになるほど心が動かされたのは初めてでした。初級部の絵を見て感じたのは懐かしさと驚きでした。自分もこんな絵を描いていたな、と懐かしく感じる作品もあれば、こんな絵は日本では見たことがない、と驚く作品も沢山ありました。……そのような作品を見るたびに『ああ、こんな絵を描いても良かったんだ』と一気に視界が広がるような衝撃を受けました。……

『こんな風に描いてはいけませんよ』と先生に注意され、なんだかもやもやしながらもそれに従っていたことを思い出しました。そのもやもやをいつしか忘れ、昼の空は青、木々は緑など、見たものをそのまま描くことに違和感がなくなり、むしろそのまま描くことしかできなくなっていました。……自分の気持ちを素直に表現しているようで、どれも生き生きとした一種の迫力を感じました。」(大学生・四二回神戸展)

「高校まで美術部には所属していました。今回、朝鮮の学生の方々の絵を目にした時、如何に自分が狭い環境にいて、面白くない絵を描いていたのかが分かりました。

今までは『美術展に参加するならこういう絵を描かなければ』と勝手に自分の心の中に『制限』を設けて描いていました。でもこの美術展は自分が経験したものとは違って、指導なさっている先生方は子どもたちの絵に『テーマ』を掲げて縛るのではなく、子どもたちの考えを重視して見守り、子どもたちも思ったこと感じたことを伸び伸びと描いている背景が目に浮かびました。どれも同じ内容の絵などなく、次にどんな内容の絵が来るのか分からないドキドキ感と同時に「羨ましさ」も感じました。私は小・中・高と常に『テーマ』を与えられ、『はみ出してはいけない』と感じる中描いてきたため、学生のみなさんの絵を見た時素直に表現できていることが羨ましいと思ったのです。……私は絵を見ることでまるで作者と会話をしたかのような充足感が得られました。そして、自分も新しい視点で絵を描きたいと思えました。」(大学生・四〇回鳥取展)

第40回鳥取展

「私は素晴らしい絵を描くための教育を受けてきた。……私の受けてきた教育の中では『ただの子ども』が『ただの子どもの絵』を描くことは難しいように思う。……小学生時代、白いキャンバスを前にして『何を描いたらいいかわからない』という友人がたく

さんいた。しかし彼らは『何を描こうか選びきれない』という悩みを抱えるのだろう。この差はいったい何なのだろうか。

自由に、のびやかに、他人にとらわれずに絵を描けること。……子どもが大人のための自分をつくりこまず、頭をからっぽにして自分を生きること。周りの大人たちは必死に唸りながらそのサポートをすること。そして子どもが大人のための子どもでない関係こそが尊いのであり、素晴らしいと感じた。」(大学生・四二回神戸展)

「私の目に止まったのは『学美賞』という文字だった。……私はその作品と学美賞という文字を見て、『なぜこの作品が?』と思った。……学美賞の文字の付いた作品を見て回ったが、それらの作品たちに共通点を見出すことはできなかった。……日本の学生美術展ならば、『上手な』作品だなと思うような作品が賞という形で比較的評価されているし、その評価に関しても私はある程度の妥当性を感じる。しかし、学美賞の評価基準はさっぱりわからない。だから……作品を見るというより作品について考える、という時間の方が全体を通して多かったように思う。

……私自身は……画用紙の白紙の部分を埋める作業がひどく苦痛だったことを思い出す。……『上手な作品』を描くためには教科書に載っている通りの、美術の先生言う通りの作品に近づけようと努力していた気がする。今思い返すと、そうして出来上がった『上手な』作品は美術本来の個人の内面を表現するという機能は削りとられ、作者の手から作品が離れてしまっている印象を受ける。

学美とは何なのか。学美は在日朝鮮学生の作品の中から作品を選ぶことで、学美の評価の基準を、メッセージを送り出しているように思う。学美の評価の基準は前述したように、私が教えられてきた美術の評価の基準とは異なる。学美賞の文字の付いた作品を見ていると自分の美術の価値基準が揺るがされる。……私が今まで培い、そして凝り固まった芸術観は『学美』の衝撃によって、壊されたように思う。」(大学生・四〇回鳥取展)

このように、学美は若い来場者がそれまで受けてきた学校教育のあり方を問う。学美を観る者は学美に問われる者に転換する。最後の感想からは、学美の作品のみならず、学美それ自体がメッセージであることが伝わってくる。

5・希望としての学美―「私が生きる力」

上述のように学美は観る者に反省を鋭く迫る。それは同時に観る者たちがこれまで気づかなかった可能性や希望を提示するということでもあるようだ。

「本当に想像以上で、驚きというか、あっという感じで、息を全部もっていかれたというか、本当に心臓が止まったという感覚がしたのである。とにかく作品が迫ってきて、ぐっとくるような、苦しいような、でも目が離せなくなるというか、そんな感じだった。ただふっと観てしまっただけなのに、涙が出るというか、爆発しそうであった。

どうしてそこまで感動したのか、それは表現にあるのではないかと思う。表現が終わらない、表現せざるをえない、そんな表現が観ているこちらにまで迫ってくるのである。そしてその表現は、作品から、というより作品を通した作者の口から、手から伝わってくるようであった。作品が、生きるということと密接につながっているように思える。私は、少しだけ美術部の経験があり、美術展にも何回か参加したことがあるのだが、作品が迫

第42回鳥取展

ってくるというような経験はなかった。今思うと、それは作品が表現ということからかけ離れているからではないかと思う。……表現ができずに終わらせてしまうような作品にしか出会ってこなかった。

この、私が今まで出会ってきた作品と、今回在日朝鮮学校美術展で出会った作品はどうしてこうも違うのだろうか。朝鮮学校の美術の先生方の話をきいて納得した。先生たちが子どもたちの表現について戦っているのである。どう表現をやめさせないか、どう表現をできないようにさせないか、そのことに先生が一生懸命に悩んでいるのである。この表現というのは、なにも美術だけに限った話ではない。自分を表現するという、とても大事な、自分を生かしてくれるものである。……私が育ってきた学校は、表現するということをさせないようにして、口も体も動かなくさせて、本当に生きるということをくれない教育だったように感じる。だからこそ、この先生たちの表現に対して戦うという姿は生きるというものをくれる、すごくまぶしいものだった。今になって出会った私だが、本当に良かったと安心している。

……今回は朝鮮学校の美術の先生方にしか出会っていないのだが、すごく受け止め方が大きいと感じた。……もうそれだけで私が生きるという力になった気がする。」

（大学生・四一回鳥取展）

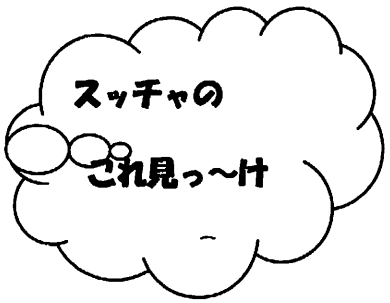
三、おわりに

以上、学美に寄せられた感想のごく一部を紹介した。これらの感想から学美のさまざまな可能性が考えられるが、その中のひとつとして学美が積極的に「してこなかった大切なこと」があることが挙げられるのではないだろうか。

二〇一四年二月に開催された第四二回学美島根展で、学美のある教員は「学美の目標は、うまさという基準を排除することだ」と筆者に語った。別の教員は「子どもたちが周囲の期待や空気を読んでしまう配慮をいかになくすかが学美にとって大切なことだ」と言った。ここに、日本の学校が積極的に行ってきた生徒への「指導」を学美は努めて排除しようとしていることがわかる。来場者たちはこの両者の違いに気づくのだろう。

学美は朝鮮学校の美術作品を展示する（だけの）場ではないようだ。むしろ、この時代を生きる人びとが普遍的に抱える課題を深く問い、それだけではなく表現のもうひとつの可能性を提示する場として機能しているのではないだろうか。その考察については別稿を準備したい。

（２０１４・４・21）



在日の存在価値を発信し、支え続けらるのは…

朝鮮高級学校に編入して間もなく、朝鮮人強制連行の歴史を初めて聞いた私は、「ウソだ、日本人がそんなことをするはずがない」と、激しい反発を感じた。それまで自分が信頼し愛着を感じていた小中学校の友人や先生を非難されたようで、耳をふさぎたかった。

イヤだった「民族学級」と「夏期学校」

私が通った地元の公立小中学校は、校区に非差別部落を含んでいた。入学してすぐに担任の先生が黒板に「びょうどう」と大きな文字で書いた場面をはっきりと覚えている。授業では折に触れ非差別部落の歴史について語られ、学級会では「差別」について繰り返し討論した。

クラスには非部落出身の児童・生徒とともに私のような在日朝鮮人も数人いた。学校側の努力が功を奏したのか、クラス内で「非差別部落出身」を非難する声は聞いたことが無い。しかし「この朝鮮人」「朝鮮人のくせに」と非難される友達の姿を度々見た。先生は「差別はいけません」と言った。しかし在日朝鮮人がなぜ差別されるのかについて説明はなかった。「朝鮮人だ」ということがいつ、どんな形で災いするかわからないという強い警戒心が心に刷り込まれていった。私にとって「朝鮮」や「朝鮮人」は触れたくないもの、近づきたくない「汚らわしいもの」のようになっていった。

そんな私を父は「民族学級」に送った。週に数時間授業を抜けて、在日朝鮮人の子どもだけが他の教室で言葉や歴史を学ぶのだ。私はこれがイヤでしようがなかった。朝鮮大学校卒業のチマチョゴリを着た先生が、「金日成主席が指導される朝鮮民主主義人民共和国は人民の楽園だ」と褒め称えるのだが、私には何のことか全くわからなかった。夏休みに総連支部で開かれる夏期学校も同様だった。

家に吹き荒れる「冷戦」の嵐

私が民族学級や夏期学校に行きたくなかった理由はもう一つあった。私は五代目とも六代目とも言われるカトリックの家庭で育った。教育熱心な在日朝鮮人の家庭では子どもが医者か弁護士になることを望むようだが、祖父の願いは医者か神父を育てることだった。父の弟妹は全員、神学校で学んだことがある。

新校舎建設のための「ピース一箱運動」
申正春

2014年・23号の目次／編集を終えて

■別冊(4月24日刊行)
今、再びあの日を称え心に刻む場
A5版・21頁+別紙4頁・頒価300円

再録・発掘資料
＊『朝鮮学校のある風景』19号からの転載
음악에 의한 시극 4・24
남시우
日文訳・歌による詩劇 4・24
南時雨

初めて見る原稿、当時の光景が…
南珠賢・西東京市在住
再録・インタビュー
＊『朝鮮学校のある風景』20号からの抜粋
「先生を殴るな」地団太踏んだ4・24
怖かった植民地時代への回帰
呉守鎮・在日朝鮮人歴史研究所顧問、公益財団法人朝鮮奨学会顧問

〈別紙〉
次の世代に残したい話
金代承〉〉fb(4・22)より転載
朝鮮総連東淀川支部
宣伝部長兼新大阪分会分会長

民族教育と私・鮮烈な記憶
東京での一九四九年教育闘争
朝鮮人学校閉鎖令が下された日
姜敏子・東淀川区東中島在住

メッセージ
4・24に想いをはせる
申在均

2014年・奇数月刊行誌『朝鮮学校のある風景』
年間購読 頒価5.800円(送料込)
1・3・5・7・9・11月配本の23号～28号
A5版・220頁～260頁 頒価980円～1.280円
ウリハッキョを記録する会・編
バックナンバー・目次 http://www4.ocn.ne.jp/~uil/ks.html
お問い合せは「一粒出版」TEL.FAX 03-6279-3356 uil21@yahoo.co.jp
＊郵便振替 00150－3－190686(工房ウイル気付)

編集を終えて

▼先日、バスに乗ったら、寝入った二人の児童に遭遇、思わずシャッターを押した。女の子は眠りこけて座席からずり落ちそうになっている、その後ろで男の子がランドセルを枕に、寝息を立てていた。無事に降りられるのか気になって途中下車できず、終点までついて行った。バスを降りる姉弟に「アンニョンヒ…」と声をかけると、小さな声で「アンニョンヒ…」と、笑顔で応える弟の前歯は一本抜けていた。一年生と四年生の姉弟だ。

入学、公開授業、遠足、四年生は、部活がはじまり、緊張の少年団入団式も、そして運動会の練習だ。

フェイスブックにアップしたら、ほっこりするコメントが寄せられた。

「ウリハッキョ、あるあるですね。とくに運動会の練習あとは眠いんですよねー」、「なんだか わからないけど、ウルッときました。この寝ている姿が可愛いくてたまらないです」、「がんばれ、ウリハッセン!」、「こんなにぐったりでもウリハッキョに通う子供たち!! 宝ですね」。

ウリハッセンと、その児童・生徒を見守る人々の温かい眼差しは、この雑誌をつくる力の源だ。

▼文字が小さいという、指摘を受けている。今号は一部ページを少し大き目の文字で組んでみた。もっと面白い、より読みやすい雑誌に、試行錯誤の日々である。

(I K)

一粒(한알)出版ブックレット・25
シリーズ・朝鮮学校の歩み 33

朝鮮学校のある風景 25

2014・5・25刊
企画編集
ウリハッキョ(朝鮮学校)を記録する会
編集・発行人 金日宇／金淑子
表紙装丁・生活技術

発 行 一粒(한알)出版
〒115-0053
東京都北区赤羽台3-4-7
TEL.FAX 03-6279-3356
Uil21@yahoo.co.jp
www4.ocn.ne.jp/~uil/p.htm

無断転載禁
頒価1.180円
(通常 頒価980円)

朝鮮学校のある風景

特　集
4·24 今、再びあの日を称え
心に刻む場 2014

裁判傍聴録　東京·愛知·広島

新 連 載
朝鮮学校研究のフィールドから

もっと知ってもらいたい朝鮮学校
日本人来場者が経験した在日朝鮮学生美術展
平壌発·12年制義務教育実施初年度の入学式
留学同はもう一つのウリハッキョ

25
シーズン5
2014
5月刊行
奇数月刊行誌

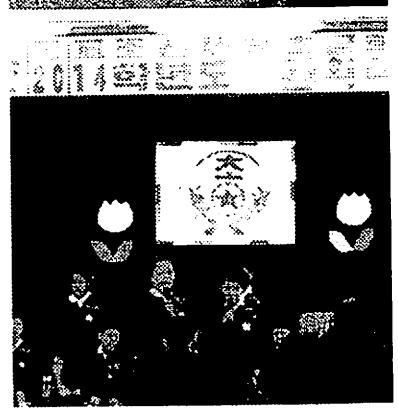
一粒（한알）出版

ウリハッキョ（朝鮮学校）を記録する会·編　www4.ocn.ne.jp/~uil/ks.html

우리학교 풍경

刺さる、在日家族ファンタジー
虫さんたちの作戦会議
文玉仙·童話選集
月刊イオ人気連載が電子書籍化
2014年 6月
App Store
iTunesストアから発売予定
※Apple, iPad, Mac, iTunes Store は、米国および他の国々で登録されたApple Inc.の商標です

25
シーズン5
2014
5月刊行
奇数月刊行誌



ルポ·東京近隣の朝鮮学校·周辺ストーリー
「サランの会」の一日給食／東京第3·新入生「一日登校」／「60万回のトライ」上映館へ／卒業式前日の東京第3と第9へ／東京第3·笑顔の卒業式／東京第6·オリニコンサート／東京でも段刈はじまる／東京第3·入学式／東京第9·校庭での花見／文科省前での「春の陣」／バス停で児童と遭遇／4校合同の少年団入団式／学校訪問で東京第6へ

リポート·朝鮮大学校短期学部 平壌での調理講習

<私の朝鮮学校物語>朝鮮大学校／岡山朝鮮初中級学校／山口朝鮮初中級学校付属幼稚園／四日市朝鮮初中級学校

【上】文科省前での金曜抗議行動
【下】東京第3の入学式

一粒（한알）出版 ブックレット25
シリーズ 朝鮮学校の歩み33

朝鮮学校のある風景（25）｜2014.5｜
2014·5·25刊○企画編集：ウリハッキョ（朝鮮学校）を記録する会○編集·発行人：金日中○装幀：宇：生活技術
発行：一粒（한알）出版○住所：〒115-0053 東京都北区赤羽台3-4-7○電話：03-6279-3356
Eメール：uil21@yahoo.co.jp○ホームページ：http://www4.ocn.ne.jp/~uil/p.htm

頒価 1,180円
※価格転嫁を停止します